

原子力の**本質**を探る

—第3回—

原子力の平和利用への先見性と決意

NPO法人
ニュークリア・サロン 出澤 正人

転禍為福

人類が文明を築いてきた端緒は火の利用からであるといわれている。猛威をふるう恐ろしい山火事が落雷や摩擦による着火によるものと知ったことが最初かどうかは兎も角、恐怖を克服した最初の人から広く集団の人々が火を安全に利用できるようになって文明を築いてきた。危険を制御して安全に利用することは、文明を支えている総ての利器に共通している。

前回で原子力安全を述べたが、今回は、危険な核反応エネルギーを福祉に利用することによって原爆の犠牲者の魂が救われると直感した永井隆博士の言葉、平和利用宣言に盛り込まれたアイゼンハワー大統領の決意、日本の原子力基本法の精神を改めて顧み、福島第一原子力発電所の事故から安易に脱原発に向かうのではなく、禍を転じて福と為す契機とし、挑戦し克服することが持続可能な文明を築き続ける人類の使命であることを確かめたい。

一九四五年、長崎の原爆投下直後、原爆被爆者救護隊長として被爆者の救護に当たった長崎大学の永井隆博士が学長宛の原子爆弾救護報告書の中で次のように述べている。

「原子爆弾ノ原理を利用シ、コレヲ動力源トシテ文化ニ貢献デキル如ク更ニ一層ノ研究ヲ進メタイ。転禍為福。世界ノ文明形態ハ原子エネルギーノ利用ニヨリ一変スルニキマツテナル。ソウシテ新シイ幸福ナ世界ガツクラレルナラバ、多数犠牲者ノ霊モ亦慰メラレルデアロウ」

原爆投下のわずか二か月後にこのような先見的な考え方ができる日本人がいた。また、「原爆の子」広島少年少女のうったえ（岩波文庫）に記された被爆手記にも原子力平和利用の時代到来が言及され感動させられる（本誌三月号二四頁）。

アトムズ・フォー・ピース

一九五三年、アイゼンハワー大統領は国連の場で「原子力平和利用」を宣言し、明確に方向性を示した。

「米国は、もし原子力による軍拡という恐ろしいトレンドが方向転換するならば、この強大な破壊力は全ての人類の福利にとって大きな福音をもたらすことができると認識している。米国は、原子力エネルギーから得られる力を平和的に利用することが、未来の夢物語ではないことを知っている。既に証明されているその可能性は、現実のものである。世界の全ての科学者と技術者が、十分

な量の核分裂性物質を利用して実験を行い、彼らのアイデアを発展させることができれば、原子力の持つ可能性はあまなく、効率的で経済的に利用されるようになるであろう。このことは疑いの余地がないことである。この原子力機関の非常に重要な責任は、この核分裂性物質が人類の平和目的のために使用されるように配分されるような方法を提示することにある。専門家は、原子力エネルギーを、農業、医療、その他の平和的活動のために利用するようになるであろう。特に重要なのは、電力不足が深刻な地域に豊富な電力を供給することである」

平和利用のために原子力関連情報を開示し、世界が原子力を新たなエネルギー源として開発を進めることになった。

原子力基本法とは

日本では、一九五五年に制定した原子力基本法に基づき原子力利用開発を進めてきた。過去六〇年の原子力産業の歴史から、他の産業に比べ圧倒的に安全性の高い産業としての実績を示してきた。

原子力基本法の条文に示されている初心をみてみよう。第一条の目的に、この法律は原子力の研究、開発

及び利用を推進することによって、将来におけるエネルギー資源を確保し、学術の進歩と産業の振興とを図り、もって人類社会の福祉と国民生活の水準向上とに寄与することと謳われ、基本方針として第二条に、原子力の研究、開発及び利用は、平和の目的に限り、安全の確保を旨として、民主的な運営の下に、自主的にこれを行うものとし、その成果を公開し、進んで国際協力に資するものとする」と謳っている。

人間の特性は前へ発達すること

一九八二年、原子力発電の推進に反対する動きを批判する『「反核」論』の中で文明評論家・吉本隆明氏は次のように述べている。

核反応は自然の解明が進み化学反応の次元から一次元違ったところへ進展したことを意味しており、その「本質」は政治や倫理の党派とも、体制・反体制とも無関係な自然の「本質」に属している。自然科学的な「本質」からいえば、科学が「核」エネルギーを解放したということは、即自的に「核」エネルギーの統御を獲

得したと同義である。

その吉本氏が、福島第一原子力発電所事故後の二〇一一年五月二十七日付毎日新聞夕刊の特集でインタビュに込んでいる。

述べていることを要約すると、知識や科学技術は元に戻すことはできない。どんなに退廃的であろうが否

定はできないので、それ以上のものを作るとか、考え出すことしか超える道はない。福島第一原子力発電所の事故によって、もう核エネルギーはダメだという考えは広がるかもしれない。専門ではない人の怒りももつともであるが、動物にない人間だけの特性は前へ前へと発達すること、技術や頭脳は高度になることはあっても、元に戻ったり、退歩することはあり得ない。

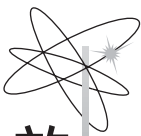
原発をやめてしまえば新たな核技術もその成果も何もなくなってしまう。事故を防ぐ技術を発達させるしかない。原子力の原理は簡単で、問題点はいかに放射性物質を遮断するかに尽きる。防御装置は本来、原発装置と同じくらい金をかけて、多様で完全なものにしないとけない。原子炉が緻密で高度になれば、同じレベルの防御装置が必要で、防御装置を発達させないといけない。科学が発達した時代になったことについて倫理的な善悪の理屈はつけない。核

燃料が肉体には危険なことを承知で少量でも大きなエネルギーを得られるようになった。一方、否定的な人にとつては、人間の生存を第一に考えれば、肉体を通過し健康被害を与えることが、すでに人間性を逸脱しているということかもしれないが、人類の歴史上、人間が一つの誤りもなく何かをしてきたことはない。

事故の教訓をもとに次世代へ繋ぐ

原子力利用は、一八九五年のX線の発見から始まり、二〇世紀初めの原子核物理学の相次ぐ発見と実証によって知見が積み重ねられてきた。政治家や科学者は、戦争、戦争後の復興、経済発展の比較的短い期間に原子力のエネルギーを平和の目的に、安全に利用する技術を目指し、その過程で、何回か事故も経験し、事故から教訓を得てより安全な技術へと前進してきた。

現在、私たちは、社会的に大きな衝撃を与えた今回の福島事故をどう受けとめるか迷いの中にいる。密接不可分な関係にある放射線と核反応に関する正しい知識を社会の常識にして、今回の福島事故の検証を踏まえた教訓をもとに、原子力利用社会のあるべき姿を考え、次の世代に繋げる道を見出さなければならぬ。



放射線と核反応の正しい知識を社会の常識に

